

アイヌ民族と2人の英国人（6）

小 柳 伸 顕

資料 1 マンロー「アイヌの熊祭」

（訳 楠 利明）

資料 2 写真に見る平取のパチラーとマンロー

1 平取

今回は、平取（北海道平取町）に焦点をあて「アイヌ民族と2人の英国人」について述べてみたいと思います。もちろん平取は現在の平取ではなく、2人の英国人が来る前の平取です。

平取のアイヌ貝澤正はその著『アイヌ わが人生』の中で、「平取町とヨーロッパ人の関係」について触れています¹。なかでもイギリス人旅行家イザベラ・バード（1831～1904）に注目し、彼女の作品『日本奥地紀行』²の平取を紹介しています。イザベラ・バードの目に当時（1878）、平取のアイヌはどう映っていたのでしょうか。少々長くなりますが、彼女の記録に直接あたってみます。

1878年と言えば、英国聖公会宣教師W・デニングが、パチラーと共に平取を訪問した前年です。それだけに平取に関する彼女の記録には興味深いものがあります。イザベラ・バードの旅は今日と異り、馬車に生活必需品を積み、通訳兼案内人を伴う旅で、今日からはその困難さは容易に想像できません。

イザベラ・バードが平取のアイヌを訪ねたのは、1878年8月23日から26日

キーワード：平取、パチラー、マンロー、アイヌ、ペンリウク

の4日間です。しかし、読み進めるうちに彼女の旅行作家としての才能に驚かされます。

最初にイザベラ・バードの通訳兼案内人の日本人伊藤のアイヌ観に触れておきます。

私はシーボルト氏に、これからもてなしを受けるアイヌ人に対して親切に優しくすることがいかに大切かを伊藤に日本語で話してほしい、と頼んだ。伊藤はそれを聞いて、たいそう憤慨して言った。「アイヌ人を丁寧に扱うなんて！彼らはただの犬です。人間ではありません」。それから彼は、アイヌ人について村でかき集めた悪い噂を残らず私に話すのであった₃。

このように当時、和人社会では一般的だったアイヌ観に対してイザベラ・バードは平取のアイヌをどう見たのでしょうか。確かに「未開人」とは言っていますが、具体的に次のようなアイヌへの眼差しが、紀行文には散見されます。

アイヌの最低で最もひどい生活でも、世界の他の多くの原住民たちの生活よりは、相当に高度で、すぐれたものではある。それから——これは私がつけ加える必要はないかもしれぬが——アイヌ人は誠実であるという点を考えるならば、わが西洋の大都市に何千という墮落した大衆がいる——彼らはキリスト教徒として生まれて、洗礼を受け、クリスチャン・ネームをもらい、最後には聖なる墓地に葬られるが、アイヌの方がずっと高度で、ずっとりっぱな生活を送っている。全体的に見るならば、アイヌは純潔であり、他人に対して親切であり、正直で崇敬の念が厚く、老人に対して思いやりがある₄。

次のこどもたちへの観察も興味深い。

子どもたちは非常にきれいで魅力的である。大人たちに欠けている知性をもてる望みがある。彼らはたいへん可愛がられる。可愛がられると同時に、実に可愛い子どもたちである⁵。

わずか4日という短い滞在期間にもかかわらず「熊送り」の記述があることには驚かされます。

アイヌ民族は熊崇拝者として他の民族と区別することができる。また彼らの最大の宗教的祭り《西洋の農神祭に相当する》は熊の祭典を特色とする。アイヌ人は温和で平和を愛好するが、猛だけしいことや勇気を非常に讃美する。熊は彼らにとって最も強く、最も猛だけしく、最も勇氣ある動物であるから、あらゆる時代を通して彼らに尊崇の念を起させてきたことであろう⁶。

またイザベラ・バードを温く迎え入れたベンリ⁷（ベンリウク）のキリスト教批判（詳しくはキリスト教の神批判）も鋭いです。

ベンリは、アイヌ人としては利口である。2年前（1876）に函館在留のデニング氏がここにやって来て、私たちすべてを造った神はただ1人であられる、と話したところ、それに対して、この賢い老人は応えて言った。「もしあなたを造った神が私たちをも造ったのであるならば、どうして、あなたはそんなに違っているのですか。どうして、あなたはそんなに金持ちで、私たちはこんなに貧乏なのですか」⁸。

なおイザベラ・バードが、アイヌにとって酒の問題（アルコール依存症）と宗教（カムイノミ）との関係にも言及している点も見落してはなりません。

アイヌと酒の問題は、かなり深刻でした。断酒、禁酒運動を起したバチラーは、結果として平取から追放されました。アイヌ自身と言うより酒を売る和

人の反感からです。

日本の酒が彼らの唯一の好物である。彼らは儲けを全部はたいて日本酒を買い、それをものすごく多量に飲む。泥酔こそは、これら未開人の望む最高の幸福であり、「神々のために飲む」と信じこんでいるために、泥酔状態は彼らにとって神聖なものとなる⁹。

2 平取とバチラー

2.1 聖公会平取教会50年

アイヌの歌人違星北斗（1902～1929年、27歳で夭逝）は、1927年7月11日の日記に当時の聖公会平取教会の様子を書き残しています。

今日は日曜日だから此の教会に生徒が集まる。メノコが七人来る。此の人達はアイヌ語で讃歌を歌ふ。其の清澄な声音は魂の奥底までも浸み込む様な気がして、一種の深い感慨に打たれた。

バチラー博士五十年の伝道は今此の無学なメノコの清い信仰で窺はれる¹⁰。

しかし、その一方違星は、7月14日の日記にこんな歌も記しています。

五十年伝道されし此のコタン
見るべきものの無きを悲しむ

平取に浴場一つ欲しいもの
金があったら建てたいものを¹¹

ここには、聖公会平取教会の50年は、アイヌにとって何であったかの問い

かけがあります。

この歌には、遼星の平取教会司祭岡村国夫への批判が込められています。

此の村で欲しいもの——浴場と図書館等の事、施薬の事も考へて見た。浴場は一寸お金がかゝるらしい。維持費も要る問題だ。けれども欲しいものである。何とかならないものだろうか。岡村先生自転車欲しいとある。どうもそれは一寸難しい。一個人の便利の為に私は心配する気がない。せめて浴場ならばと考へて見る¹²。

こう述べた後に先の歌が続くのです。

当時平取教会の司祭は岡村国夫でした。バチラーの養女バチラー八重子（1884～1961）は、伝道師として働いていました。遼星は、バチラー八重子を慕い、しばしば教会を訪ね、八重子を助けていました。岡村の妻千代子は、八重子の妹で、平取幼稚園で働いていました。

岡村司祭は、自転車が欲しいと言うが、それは的外れですよと言う痛烈な岡村批判または教会批判を読みとることができます。つまり平取教会、岡村司祭はどこに立ってものを言っているのかとの批判です。教会に集うアイヌにとって最も切実な願いは、アイヌのための浴場でした。にも関わらず司祭個人の自転車が欲しいと言うなんてとの批判です。

平取教会はもともとアイヌのために設立された教会でした。創立者バチラーは、アイヌ中心に教会形成を願っていました。その動機は既に述べたように来日、そして函館で経験したアイヌとの出会いにあります。

2.2 平取教会とバチラー

バチラーが中国伝道を志し、英国聖公会海外伝道協会（CMS）の給費生として英国を出航したのは、1876年、バチラー23歳のときでした¹³。

途中、香港に研修のため立ち寄りますが、気候が合わず体調をくづし転地療養のため来日。横浜経由で英国と気候の似た函館に来ます。

函館は当時英国聖公会の宣教拠点で、責任者はW・デニング（1874年5月来日）でした。バチラーは、デニング指導のもと日本での生活をはじめます。バチラーが日本人学生との生活の中で経験したのは、日本人学生たちのアイヌ民族への差別でした。そんな日々の中でバチラーが願ったのはアイヌ民族との出会いでした。その願いは、函館の路上で実現します。バチラーは次のように書いています。

お目にかかると直ぐ恭々しくお辞儀をして両手でお髭を撫で下げました。……私は夫を見て髭を持ってをりませんでした、其の人たちの真似で同じように髭のあるべき処を撫でて挨拶致しました。するとお二人は嬉しそうに笑って何かアイヌ語で御話をなさいました。……其の人達は私がアイヌ語を知らないのを知ってから日本語で暫くお話なさいました。この人達に会った後、私はいよいよ一層此の民族の救済の為に働かうといふ決意を強く致しました。之が明治十一年（1878）三月二十八日の事です¹⁴⁰。

バチラーは、この出会い以来、コタンに直接アイヌを訪ねたいと思ってましたが、その願いは、1879年、司祭デニングの案内で実現します。バチラーのその後の人生を決めた平取訪問です。

平取の旅で出会ったのが首長平村ペンリウク（ベンリ・1833～1903）です。バチラーはその年の9月から12月まで約4か月平取に滞在し、ペンリウクからアイヌ語を学びます。

バチラーが再び平取を尋ねたのは1881年、馬車で札幌経由で平取へ行きます。バチラーを迎えたペンリウクは、前回の訪問時に約束した通り、ペンリウクの家（チセ）の片隅にバチラー専用の部屋を用意しました。

このようなペンリウクの献身的な協力があってはじめてバチラーの平取での活動は可能でした。バチラーの自叙伝『我が記憶をたどりて』¹⁵を読む限り、バチラーは、当時外国人に禁じられていた活動（自由な旅行）をペンリウク

の知恵で次々と実現するのです。まさに危険を犯す、つまり法に触れることをバチラーは、ペンリウクに要請したのです。

このようなペンリウクの協力とバチラーの努力にもかかわらず平取に聖公会の教会が竣工し活動をはじめたのは、実にバチラーの平取初訪問から16年目です。これには、バチラーの英国への一時帰国なども関係しますが、最大の障害は、和人による活動妨害です。

妨害の第一は、パスポート事件です。1884年、新しいパスポートを申請したときに起りました。申請の却下です。それはバチラーが資格外活動をしたので申請を却下するという訟訴でした。裁判で明らかになったのは日本政府があげた三つの理由がいずれも捏造であったことが判明し、パスポートは発給されます。しかし、このパスポート事件は、バチラーのアイヌへの働きかけへの禁止ないしは妨害でした。その証拠に、裁判のあと和人の役人はこう言いました。「バチラー師はアイヌ語を存続させよう、と努力しているが、われわれ日本当局は、死滅することを望んでいる」¹⁶。露骨な同化政策が、パスポート事件の背後にあることを見落してはなりません。

更にパスポート事件では、日本政府の同化政策とともに平取の和人たちの陰謀が告訴を後押ししました。バチラーの平取からの追放です。バチラーが熱心に勧めたアイヌへの禁酒ないしは断酒活動への反感です。アイヌへ酒を販売し、暴利を稼いでいた和人の商人たちは、自分たちの生活を圧迫する存在としてバチラーの平取からの追放を画策しました。

この告訴と追放運動の結果、バチラーは平取での活動を断念し、活動の拠点を幌別に移します。告訴事件の翌年、1885年です。

バチラーが再び平取で活動をはじめたのは、第2回の帰英のあと、1891年からです。平取での伝道再開、そして1895年の平取教会の竣工を迎えました。バチラーを側面から支えたペンリウクは、その竣工を共に喜ぶことができたが、1903年死去します。

ペンリウクの平取教会設立への貢献は計り知れないものがあります。ペンリウクの働きなしに平取教会はできなかったと言っても過言ではありません。

苦境にあってバチラーを常に支えたのは、一通の書簡（1881年12月16日付）です。それは平取のアイヌ7人から英国聖公会海外伝道協会宛のもので、ペンリウク等は、一時帰国するバチラーに託しました。書簡には、バチラーがこれからも引き続き平取でその働きを続けてほしいと記されていました。書簡の原文はローマ字で綴られたアイヌ語で、それにバチラーの筆跡と思われる英訳が添えられていました。書簡の筆頭署名人はペンリウクでした¹⁷。

2.3 平取とバチラー

現在、平取でバチラーの名を知る人は決して多いとは言えません。平取でバチラー生誕100年祭が執り行われたのは1954年11月3日です。実に60年以上前のことです。また、平取で一般に公開されているバチラー関係資料も決して多くありません。しかし、注意深く平取を歩くとそのいくつかに出会えます。

その一つが、日本聖公会北海道教区平取教会とバチラー保育園です。バチラー保育園は1923年設立された平取幼稚園¹⁸の流れを引き継ぐこどもの施設です。平取教会の門の横に「社会福祉法人聖公会北海道福祉会バチラー保育園」と書かれた柱が立っています¹⁹。

いま一つは、沙流川歴史館の裏庭にある「平取町歴史の散歩道」の碑の一つが、ジョン・バチラーの碑です。碑には「ジョン・バチラー John Batchelor, 1864～1944)」と刻まれ、その下にバチラーの来歴、日本での活動とともに平取のペンリウクからアイヌ語を学んだことが記されています。

三つ目は、平取小学校の校門のすぐ傍にある「遼星北斗の碑」（1968年（昭和43年）、遼星北斗の会建立）です。碑に遼星北斗の歌が二首刻まれています。

沙流川は 昨日の雨で 水濁り コタンの昔 ささやきつつゆく
平取に 浴場一つ 欲しいもの 金があったら建てたいものを²⁰

二首目はすでに紹介済みです。しかし、解説なしにこの歌からバチラー、平取教会、バチラー八重子を誰が想像するでしょうか。

なおバチラーにとっての恩人ペンリウクの「頌徳碑」（1934年平取村長名で建立）が平取の義経神社境内にあることは記憶にとどめたいものです²¹。

3 平取とマンロー

3.1 白老と平取

スコットランド出身（1863年生）のマンローは、エディンバラ大学医学部を卒業し、船医としてインドをめざしたのは1888年、マンロー25歳のときです。船医を志したのは学生時代から続いていた考古学研究を世界各地で出来ると考えたからです²²。

1890年、横浜に寄港したマンローは、翌年、日本での考古学研究を志し、横浜で外科医として働きながら研究を続けることを決心します。

1898年、バチラーの案内で北海道を旅行し、白老と平取を訪問しています。これが第1回の平取訪問です。それ以後も北海道の研究旅行は続けていますが、平取の第2回目の訪問は、1904年です。その翌年1905年マンローは日本に帰化します。日本での研究を腰をすえて続ける姿勢と言えます。しかし、研究課題は、日本の考古学でした。その証拠に1911年 Prehistoric Japan を出版しています。

マンローの関心がアイヌに向けられるようになったのは、1915年の北海道旅行での釧路、春採のアイヌコタン訪問からです。この旅行で熊送りを体験し、記録をとり写真に収めています。この体験と記録に基き1916年4月26日、日本アジア協会例会で「アイヌの熊祭」について講演します。その講演録は、同年4月30日、日本の英字新聞 The Japan Advertiser に載ります。テーマは、The Ainu Bear Festival です。

今回、友人楠利明の協力を得てその全文を日本語で紹介することができました。全文を資料として巻末に載せました。

この講演については以前、部分的に紹介したことがあります²³、この一文は、その後のマンローの「熊送り」研究の第一歩であると同時に、平取での

映像「熊送り」(1930年)への序論と言えます。またマンローが、平取に永住しようとした大きな動機でもあります。

地域で言えばマンローは、それまで平取より白老と深い関係にありました。

1917年、マンローは北海道庁からアイヌの生活実態調査を(諮問)依頼され、その年末に答申を出しています²⁴。生活実態調査の地域は平取ではなく白老でした。白老を選んだ理由のひとつにはマンローが、1916年、白老に2か月ほど滞在し、調査研究を続けたことをあげることができます。白老との親密さがうかがえます。しかし、なぜ、熊送りの撮影が、白老でなく平取か、手持の資料からは十分な推察はできません。

しかし、1930年、平取での熊送り撮影を機にマンローは、平取を活動(研究と医療)の拠点にします。1932年です。

3.2 平取のマンロー邸

マンローは、1931年、自宅建築のため平取に土地を購入します。平取永住のための第一歩です。これまで生活の拠点は横浜であり軽井沢でした。北海道への旅は調査、研究のためでした。もっとも1931年の秋から翌年の1月まで、静内、平取で研究を続けます。

自宅建築は後にマンロー邸と呼ばれた西洋風の建物です。マンローは自宅建築に先だち仮住宅に住み、周辺のアイヌの無料診療を始めます。それは、白老の生活実態調査でアイヌの健康がどんな状態にあるかをよく把握していたからです。しかし、仮住宅での活動は決して順調ではありませんでした。1932年、火災で仮住宅と共に莫大なアイヌ関係資料を焼失します。この火災を人々はマンローの「失火」と処理しようとしたましたが、マンロー自身は、不審火を疑いませんでした。いくら帰化したとは言え、官憲のマンローへの監視には厳しいものがありました。それはマンローへのスパイ容疑です。

しかし、マンローは、新築したマンロー邸(1933)で医療活動と研究に専念します。医療活動はもちろん無料です。その資金の捻出と研究費が必要です。マンローは資金の一部を夏、軽井沢での診療活動で作り出し、研究費は幸い

にもセリグマン教授の仲介でロックフェラー財団からのアイヌ文化研究助成金に支えられました。

ロックフェラー財団の支援があつてこそ「熊送り」の映像撮影も可能でした。「熊送り」の撮影は一般に平取永住後と考えがちですが、既に述べた通り全く逆です。

どんな目的でマンローが平取永住をめざしたかは、内田順子（国立民俗歴史博物館）の研究で明らかにされています²⁵。しかし、なぜ平取永住、否「熊送り」撮影が平取で可能であったかは説明されていません。内田の研究は、永住後、マンローと平取のアイヌとの交流がいかに親密で信頼に満ちたものであったかを物語っています。

「熊送り」は、アイヌにとっては最高の宗教儀礼です。それを公開するだけでなく映像にすることを認めたことは、永住以前だけにやはり驚きです。撮影に至る過程を解明することもマンロー研究の一つの課題に思えてきます。

また1936年3月27日から4日間、マンローは、平取で久保寺逸彦が撮影した「熊送り」にも協力しています。これはセットではなく平取のアイヌ二谷国松家で執り行われた「熊送り」の記録です。映像は今日も非公開ですが、平取永住後のマンローが協力した映像だけに機会があれば、ぜひ視聴したいものです。なお二谷国松は、結核でその家族（父・妻・娘）も同病でマンローの診療を受けていました²⁶。無論、無料です。しかし、この時期（1936～1937）マンローは経済的に非常に苦しく再度軽井沢移住を考えたようですが、平取での研究と診療活動が続ける決断をした時代でもありました。

当時マンローを訪ねたイタリア人研究者フォスコ・マライーニ（1912～2004）は次のように語っています。

彼はアイヌの人たちにひじょうに信用されていました。彼はたいへんなヒューマニストで、アイヌの人たちの病人を、無料で毎日、治療していましたから。私もよく見かけましたが、朝早くからアイヌの人たちの病人が五・六人、ときには十人もマンローさんの家の客間で待っていたも

のです。けが人やいろんな病気の人が来ていました。彼は毎日、3時間くらいはそういう人たちの治療をしていました。そして往診にもよく出かけていたようです²⁷。

しかし、このマライーニとの交流が後日、マンローまでも治安維持法の対象にしてしまいます。その理由は、マライーニの北海道大学の友人宮沢弘幸が、当時北大英語講師ハロルド・レーン夫妻（米国人）に北海道内の海軍基地の存在を漏したとして3人がスパイ容疑で逮捕（1941年12月8日）されたからです。友人の友人は、関係者と官憲は決めつけこれまで以上にマンローを監視しました。

体調不良のマンローは病床に伏す日々でしたが、翌1942年4月11日、マンロー邸でその生涯を終えます。享年79歳。マンローは自分の葬儀をアイヌブリ（アイヌ式）でと言い残していました。しかし、それは無視され、キリスト教式でした。ただ遺骨は、分骨され平取のトイピラの丘に埋葬されました。

マンローの臨終に立ちあったマライーニは、自分の葬儀を教会（キリスト教）でしない弁明を告別式で配ったと、社会人類学者谷 泰は「フォスコ・マライーニの最後の弁明」²⁸で紹介しています。あるいはマンローの葬儀と関係あるのではと思います。

3.3 平取のマンロー

バチラーと比較するとき平取のマンローの足跡は明らかです。

その一つは、マンロー邸と前庭にある碑です²⁹。ただマンロー邸の歴史を辿るとき、日本人のアイヌ観が見え隠れします。マンローは生前、自分の死後、マンロー邸（含むアイヌ関係資料）の管理を北大の鷹部屋福平に託します。しかし、鷹部屋は生活に窮し、マンロー邸を資料ごと売り払います³⁰。資料の散逸。多分その中には「熊送り」の映像も入っていたでしょう。以後、マンロー邸は廃屋と化していましたが、1965年、英国大使館の関係者が競売で購入し、北大に寄贈。1966年、北海道大学北方文化研究所二風谷分室として

再出発し、現在は、北海道大学大学院文学研究科、文学部二風谷研究室として管理運営されています³¹。

また、前庭にある「マンロー顕彰碑」は、マンローの生誕を記念し1975年6月16日、「マンロー先生の遺徳を偲ぶ会」によって除幕式が行われています。

その二は、前述のトイピラの丘のマンローの墓碑です。トイピラの丘は墓地ですが、入るとすぐのところに「二風谷部落有縁無縁三界萬霊之塔」があります³²。左右にはアイヌの墓標を示す二本の石柱があります。その奥にマンローの墓碑があります。その向って左に貝澤正の墓碑があります。碑は大きな石に「和」と刻まれ、その右に貝澤家の墓誌があり、そこに貝澤正1992年2月3日79歳が、貝澤モヌパノ1933年2月10日59歳等と共に刻まれています。

現在のマンロー墓碑は、桑原千代子のマンロー夫妻の墓と一緒に入りたいとの生前の願いに基き、1986年9月「マンロー先生慰霊の会」（代表貝澤正）によって建立されたものです。ここには以前、ゴルドン・マンロー之墓、チヨ・マンロー之墓と記された十字架（印）の墓標が二本立っていました。アイヌの墓地トイピラの丘で貝澤家の隣りに立つ墓碑は、生前のマンローの願いを幾分なりとも実現していると言えるでしょう。

その三は、旧マンロー邸前庭の「マンロー顕彰碑」前で平取の有志「マンロー先生の遺徳を偲ぶ会」運営委員会（代表貝澤耕一）が開く「偲ぶ会」です。10年以上続いています。2011年にはマンローの孫アイリン・マンロー（在ドイツ）も参加しています³³。マンローは、平取のアイヌにとって現在もお忘れることのできない人なのです。

4 むすびにかえて

平取のパチラーとマンローを取り上げました。マンロー没後70余年になりますが、いまなおマンローが平取のアイヌの心の中に生きていることを実感します。それは、マンローが経済的困難を乗り越え平取で永住を決意し、診

療と研究をその最期まで続けたことと無関係とは思われません。共に生活することの重要性を改めて知らされます。

確かにバチラーも日本永住を希望しましたが、戦争期で認められず帰国。最期を故郷アックフィールド村で迎え教会の墓地に埋葬されました。享年90歳。教会の前庭には北海道地図入りの記念碑があります³⁴。

平取との関係で言えば、ペンリウクとの出会がその後のアイヌ研究、アイヌ語辞典等を生み出すことになりました³⁵。しかし、マンローのような印象を平取のアイヌには残すことはできませんでした。

*

今回の研究ノートを書くにあたり、出村文理さん、森岡健治さん（平取町・沙流川歴史館）には資料の件で、楠利明さん（日本キリスト教団氏家教会信徒）には、マンローの英文資料翻訳の件で大変お世話になりました。またこの夏、平取（二風谷）と一緒に旅した4人の友人たちの友情に感謝しつつ、ここに記して感謝の意とします。ありがとうございます。

（2015年10月27日）

註

- 1) 貝澤正 1993 『アイヌ わが人生』 岩波書店 P147～159
- 2) イザベラ・バード 2000 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 P373～447
- 3) イザベラ・バード 2000 P372
- 4) イザベラ・バード 2000 P404
- 5) イザベラ・バード 2000 P411
- 6) イザベラ・バード 2000 P432
- 7) 高梨訳は、イザベラに従い ペンリとしているが正確には ペンリウク 以下ペンリウクに統一する
- 8) イザベラ・バード 2000 P444
- 9) イザベラ・バード 2000 P440
- 10) 遼星北斗 遺稿1984 『コタン』 草風館 P75～76
- 11) 遼星北斗 1984 P77
- 12) 遼星北斗 1984 P76

- 13) バチラーの生涯については、桃山学院大学キリスト教論集 第43号 2007
「アイヌ民族と2人の英国人」（1） P229～230参照
- 14) ジョン・バチラー自叙傳『我が記憶をたどりて』 昭和3（1928） 文録社
P116～117 なお『我が記憶をたどりて』は、村崎恭子校訂で 北海道出版企画
センターから北方新書の一冊として出版されている（2008）。カナ使いはそのまま、
漢字は、現在使われているものにして引用した。
- 15) ジョン・バチラー 昭和3年 例えばP141以下
- 16) ジョン・バチラー遺稿 1993 『わが人生の軌跡』 仁多見巖・飯田洋右・訳
編 P137～139
- 17) 『ジョン・バチラーの手紙』 1965 仁多見巖 訳編 山本書店 P43～44
- 18) 平取幼稚園の創立年については、諸説あります。1922年（大正11年）と1923年（大
正12年）、1924（大正13年）に分れますが、ここでは、平取聖公会宣教百三十周
年記念誌『主に愛されて生きる YESU EN OMAP』 日本聖公会北海道教区平
取聖公会 2009年10月12日の「平取聖公会宣教130年 年表」（P56）に従い
1923年（大正12年）とします。
- 19) 現在は幼稚園ではなくて保育園だが、保育園の建物はバチラー記念館と命名
されています。資料の写真参照（2－1－2，3）
- 20) 資料の写真参照（2－1－4）
- 21) 義経神社については、平取町文化的景観解説シートの34 「義経神社」参照
- 22) 桃山学院大学キリスト教論集 第43号 P230・234～236参照
- 23) 桃山学院大学キリスト教論集 第50号 P232
- 24) 桃山学院大学キリスト教論集 第47号 P69～80
- 25) 桃山学院大学キリスト教論集 第49号 P238～239 「沙流川歴史館年報」第
13号沙流川歴史館 平成24年（2012） 内田順子 「二風谷におけるマンロー～
最新の調査からわかったこと」 P15～33
- 26) 桑原千代子 1983『わがマンロー伝—ある英人医師・アイヌ研究家の生涯』
新宿書房 P36
- 27) 梅原猛・藤村久和＝編 1990『アイヌ学の夜明け』 アイヌ研究の回想「昭
和十年代の二風谷」対談 下・マライーニ／梅原猛 P208～228 のP219のマ
ライーニの発言。
- 28) 谷 泰 岩波「図書」 2010年11月 P10～15 マライーニの宗教に対する考察
が興味深い。

- 29) 資料の写真参照 (2-1-5) マンローにも既に紹介したバチラーと同じように「平取町 歴史の散歩道」マンロー碑がある。
- 30) 貝澤正 1993 P151~152
- 31) 平取町文化的景観解説シート40「旧マンロー邸」参照
- 32) 資料の写真参照 (2-2-1, 2, 3, 4)
- 33) 北海道新聞 2011年10月17日「二風谷永住 無償診療の英国人 マンロー博士 60人偲ぶ」
- 34) バチラー 1993 P301~304
- 35) 村崎恭子は、バチラー『我が記憶をたどりて』の校訂版のあとがき「復刻版出版に当って」の中で、「もしバチラーが北海道でアイヌ伝道をやらなかったら、金成まつ筆録の『アイヌ叙事詩ユーカラ (八巻)』も知里幸恵の『アイヌ神謡集』も知里真志保の『分類アイヌ語辞典』もこの世に存在しなかったと言っても過言ではない」と記しています (P347)。その出発点は、平取のペンリウクであり、改めてペンリウクの働きの偉大さに気付かされます。

資料1 マンロー「アイヌの熊祭」(訳 楠 利明)

アイヌの熊祭

原初的儀式の生き生きとした記述

～アイヌの霊的世界を概観する～

以下は、N. G. マンロー博士が水曜日午後^{*(1)}、日本アジア協会の席で朗読発表された「アイヌの熊祭」に関する考察を全文記録したもの。同博士はこの主題に関し最も権威ある現役研究者の一人である。

①アイヌの人々にとって熊祭はイオマンデ、即ち「送り出すこと」として知られています。狩りの際にクマが殺されると、事情の許す限り、その死骸をコタン、即ち村・集落に持ち帰り、そこでイオマンデが執り行われます。もし持ち帰ることができない時は、現場の狩猟小屋で略式の儀式を執り行い、決して儀式自体が省略されることはありません。成熟したクマの見送り儀式はカムイ・イオマンデ、即ち「神送り」と呼ばれます。一方、儀式に供するため^{*(2)}に家で飼育された仔グマの見送り儀式は、ヘベレ・イオマンデと呼ばれて、時に受身形でヘベレ・アオマンデ、即ち「仔グマが送られる」と言い表されることもあります。めったにないことですが、仔グマが2歳になるまで「送り出され」^{*(3)}ない時は、もはやヘベレではなく、リアップと呼ばれます。熊祭のもう一つの呼称はカムイ・マラプトあるいはヘベレ・マラプトで、後者は饗宴の意ですが、おそらく普段使われている「めずらしい」あるいは「貴重なもの」の意でもあります。動物の頭骨をマラプト・カムイと呼び、これは「吉・めでたいもの」とされていて、しばしば縁起の良いものとして大切にされます。また、占いの道具としてさえも大切にされます。

②成熟したクマを送る儀式は、ヘベレのそれに大変似ているのですが、社会的にもっと幅広く、そしてより手の込んだスケールで執り行われます。この

祭りはアイヌのさまざまな祭一般の中でもかなり代表的なものと言えるでしょう。それは、すべての活ける神々がそこに招かれ、そしてそれぞれの格と地位に応じた栄誉ともてなしを受けるからです。ということから、アイヌの神殿に居並ぶ主要な神々についてここで簡単に紹介しておきましょう。

③今でも lower culture ^{*(4)} (下位文化) 圏においては、宗教というものがもっぱら人間の物理的なニーズや願望に応えようとするものであることを私たちは知っています。そして、日本の北部地域で現在も生き残るアイヌの宗教行動もそのような思いに導かれています。下位文化においては魔術と宗教との間の親近性があまりにも強いため、多くの場合この二つを分けて考えることができません。とは言え、アイヌの宗教において魔術はもはや主流ではない、という人がいるかもしれませんが、実際にはその名残が完全に消えてなくなった訳ではなく、残っていて、魔術は今も日常生活のさまざまな場面でそれなりの役割を担っています。アイヌの人々は神々に懇願の祈りを捧げますが、ストレートに無理な願いごととはしないまでも、さまざまな慣習の中で神々の加護を身に沁みて感じ取っています。神々が気に入るようにと付ける名称、取るべき態度、声づかい、だましこみや丸めこみの言葉、捧げもの等々によって表される神前での礼法、そして、時と場合によっては、これらすべてのことを留保しますよ、やりませんよ、という、礼儀正しいことは礼儀正しいけれども、神々に対する明らかな脅しなど、これらすべてのことが魔術の名残と言えます。

④いまアイヌの人たちは古い文化や信仰を急速に失いつつあります。しかしエカシ、即ち古老やその監督指導下に今もある若い世代は、何であれすべてのものは目に見えないカウンターパート即ち魂を持つという世界で、霊の影響に取り囲まれて生きています。この考えをあらわす言葉がラマツトあるいはラマで、これは往々にして潜在的かつ動的であって、決して覚知されるものではありません。ラマツトとは客観世界に映し出された人格の影です。ア

イヌの人たちはさまざまな度合いでラマツトと向き合っています。日常の用具、山、木々、火そして水にまつわるラマツトです。人間や動物に住みついているラマツトもいるし、別々に住みついていたり、ただぼんやりとしたものや、住居とか名前に漠然とつけられているものもあります。最高位の神々はこの序列に属していますが、邪悪な性質のラマツトもいます。邪悪とはこの場合、有害な、と言った意味においてです。ラマツトは太平洋諸島でマナあるいはクラマツト〔と呼ばれる超自然的な力〕と同じように、時に対象物から離れていたり、離れようとすれば離れることができるものです。人の肉体に宿ることもあれば、どんな物にでも生来的に備わっているとされたりもします。

⑤アイヌはいつの時代にあっても文字を持たなかったこと、そして何世紀にもわたっていかなる中央支配権力の下で統一されることも全くなかったこと、そして宗教信条や儀式を教授し、それらの統一性を保つための神官カーストや階級もなかったことなどを考えると、さまざまな地域共同体でほとんど違いが認められないことには驚かされます。確かにそれなりの違いはあるものの、総体としては驚くほどの社会的合一性が成立していて、これはオーストラリアにも見られるような社会間の緊密さに帰すべきもので、事実、言語がその証左となっています。したがってこれから述べることは、若干の地域差はあれ、アイヌの一般的な信仰ならびにそうした信仰に則って為される慣行をあらわすものとしてお聞き頂きたいと思います。

⑥カムイという言葉は神を意味し、日本語の「神」に相当するものです。しかしその語源については良く分かりません。この言葉は神々自体を指すだけでなく、非常に印象深いもの、厄介で運の悪いもの、恐ろしいもの等々なんでも、時には美しいものすらを指す言葉です。ヨーロッパの人々は神の愛やその素晴らしさについて語ることはありますが、驚嘆すべき物であってもその物の内実を知れば、それに挨拶の言葉を述べることはしません。一方

アイヌの人々の場合、例えば汽車、前にアイヌの長を乗せてあげたことのある自動車、あるいはどこでも喜ばれた蓄音機と私たちヨーロッパの音楽、などに対してもこの挨拶の言葉を述べるのです。医療行為を受けたことへの過度ともいえるほどの謝辞にもこの表現方法が使われていたので、かなりの適用幅を持つものとみるべきでしょう。これらの例で示したように、[とある物・事象に対し抱く] 気持ちによって人は挨拶という行為へと導かれていきます。これはオンガミと呼ばれ、元々は拝礼行動のひとつです。日本語の「拝む」の親戚のような言葉なのですが、それよりももっとうやうやしく、所作は優美です。[もともと神々に対するものであった] このような挨拶作法は現在、男性の間では社交上の挨拶にまで広がっています。

⑦アイヌの神々は三つに分類することができます。すなわち、高位のあるいは受動的でおとなしい神々、屋外の神々、そして屋内の神々です。高位の神々のうちで最高位にあるのが創造概念あるいは抽象概念のモシリ・カラ・カムイで、この世の神聖なる創造者です。これよりさらに際立っているのがオイナ、即ちアオイナ・カムイで、アイヌの初期伝承の擬人概念です。下位文化の高位神同様、これらの神々は懇願対象でも、捧げものによってなだめられたりする存在でもありません。オイナ・カムイは祖先神とはみなされていませんが、そうだと言う人も中にはいます。今日のアイヌが祖先を拝むことはしません。ただし供物を捧げる時・場面はあり、特に、ボロ・オメカップと呼ばれる、熊祭の後に執り行われる2種類の饗宴のうちのより盛大な方がこれに該当します。また、アイヌは自らの先祖を神とはみなしません。おそらくこれは、2千年続いた日本式の農法到来の波を前にしてアイヌの人々が後退していき、墓や人々の社会的な結びつきが根こそぎにされたためと思われます。強力な族長とか王が存在しなかったことが要因のひとつに考えられます。もしもアイヌの人が、「なぜオイナ・カムイに祈りを捧げたり供物を捧げたりしないのか」と問われたとすると、「オイナ・カムイが地上に居られた時、神々が知らない伝説、また特に、どうやって神々への捧げものを作り、以ってそ

れらの神々の好意を受ける方法、などを含むありとあらゆることをアイヌに教えたからだ」と答えるでしょう。「オイナ・カムイはすべてを知っていて、足りないものは何もなく、やるべきことを成し遂げたのだから、そして他の神々が今ここにいて助けて下さる用意がある時に、なぜまたオイナ・カムイに厄介をかけるのか」とも。

⑧屋外の神々のなかで最初に来るのがシリ・コロ・カムイまたはイウォノスケ・ウン・カムイで、これは自然界の植生、特に木の神です。後者の名称はこの神が山に住むものであることを暗示しています。シランパ・カムイ^{*(5)}、即ち宇宙の聖なる長、という名前でイウォノスケ・ウン・カムイのラマツト、即ち魂、が認知され、植生そのものがシランパ・カムイ^{*(6)}の、目に見える体であると言われています。この神から家、小舟、網、道具、器具、武具、食料そして衣服がもたらされます。ということから、この神が占める地位は容易に想像していただけるでしょう。

⑨次に重要なのが、今述べたシリ・コロ・カムイと以前は同等の地位にあったことをうかがわせる、イウォロ・シリパ・ウン・カムイまたはモット・ウシュ・カムイで、これは山の頂、あるいは峰を領有する神です。この神はまたイソ・サンゲ・カムイ、即ち猟をさずけて下さる神、とも呼ばれています。この神のラマツトはクマの一族に受肉し、特に強力なリーダーグマに集中して宿ります。このリーダーグマは人が近づくことのできない岩場に棲み、目撃されることはまずありません。ヘベレ・イオマンデの祭においてこの神がきわめて顕著な地位を占めることは言うまでもありません。

⑩屋外の神々の中で3番目に位置するのがワッカ・ウシュ・カムイで、さまざまな水を司る神です。つまり一般に河川や淡水などの女神で、その乳は大地を養うとされます。水は食料よりもずっと差し迫った必需品であり、洗い物を除くあらゆる通常の用途に使われます。とりとめもない理由から、ある

いは神の怒りを招かぬようにと、決して洗い物のために水を使うことはしません。湖と川とは食料の宝庫です。以前は冬が来る前の河川にたくさんのサケがいて、これはアイヌの食料庫に蓄えられ、家族の食べ物となり、また祭りにも供されます。それゆえこの女神の神聖度は高いとされます。この女神に関連するものとして川の地域神が居り、その中でもここではチワッシュ・コロ・カムイに触れておきましょう。これは川口の神で、祭りの席でもたいいの場合祀られる神です。

⑪その次に来るのがマサラ・コロ・カムイで、海岸を領有する神です。時にイヤ・ウン・カムイとも呼ばれ、この名前には、小舟が着岸するときに差し出される助けの意が暗示されています。嵐に遭うとこの神に祈り、漁に出かける前にもそうします。疫病が近くに迫ってくると人々はこの神に助けを求めます。

⑫トマリ・コロ・カムイ、即ち沖合を司る神、は海産物の主たる提供者であり、それら海の幸は網、釣り糸、あるいは手でたぐり寄せられます。別称であるイソ・ヤング・カムイという名称も、漁をもたらす神を意味することから、したがってふさわしい名前と言えます。イソあるいはイショはあらゆる種類の動物の餌のことです。ヘベレ・イオマンデにおいては時に他の神々にも会うことができます。地域の山や川、聖なる岩、あるいはまたキツネ、のそれぞれのラマツトなどで、これらは仔グマを所有し祭主である家族のいわば特別な招待により祭場にやってくるのです。

⑬家事を司る神も決して存在しないわけではありません。アイヌの家庭生活を護り維持する三人組の屋内神は、霊界にあって灵力の弱い「仕えの神」に補助され、特別に急を要する時には、屋外の神々の中から請い求められてきたラマツトによりさらに力を増します。長々しい説明になったと思われるかも知れませんが、熊祭を語る前にこれらの事柄をある程度理解しておく必要があります。家庭を護る三神の一人で、闇の力に抗する確固たる信念をアイ

ヌに吹き込んでくれるのがアベ・カムイ、火の女神です。親しみを込めてアベ・フチという名で知られていて、この伝統ある権威と名前により、火の神が女性であることにアイヌの人々は納得します。フチ (Fuchi)、フジ (Fuji)、フンチ (Funchi)、フチ (Huchi)、フンチ (Hunchi) はすべて火をあらわす呼び名であって、蝦夷の北ではこの神はフンチ (Funchi) またはフンチ (Hunchi)・カムイと呼ばれている、と批評する者がいるかもしれません。しかし、おばあさんあるいは女祖先を意味するフチ (Fuchi) は、火守りに対する正に適切な名前である、と言うのがそれに対する答えです。この女神は調理も担っていることから果たすべき務めが雑多であるため、食器を洗わなければならなかったとすると、火を守る、つまり火を絶やさないでおくことができません。しかし幸いにもその必要はありません。なぜなら、食べ物は次の時まで壺に残るし、一方で、お椀は人差し指あるいは舌で見事にきれいにされていくからです。火の女神の完全な名称はアベ・フチ・チランゲ・カムイ、即ち火のおばあさん、天から降りてこられた神です。数あるアイヌの神々の中でもこの女神はアイヌの心情に一番寄り添っているものと言えます。昔のヘスティア[ギリシャ神話の神]のように、この女神は炉の主であり、食べ物の味を整え、またその消化を良くし、冬の寒い日や肌寒い夜に家族の輪に温かさをもたらし、アイヌの小屋の薄暗がりに明るい団らんの光をとますのです。この女神は祭の場での陽気で快活な女主人であり、日々の生活の重荷と喜びの中にあって、自信に満ちた思いやりのある存在です。この神が女性であるということは、アイヌ女性の真価が言わず語りに認められているということであって、これはアイヌの男社会ではほぼ唯一のケースだと言えます。わずかばかりの畑、森、そして家の中での彼女の苦勞なしでは、さらには困難や苦悩の中で彼女を支えた母性本能なしでは、アイヌ民族は過去の物語となっていたでしょう。火の女神は単に自分の影響下で起こるあらゆる事態にいつでも助けを差し伸べてくれる存在というだけでなく、何であれ他の神々の助力が必要な事態にあっては、それらの神々との仲裁役を担います。病、事故、不和、飢餓、山や海での仕事などすべての社会的な出来事ないし問題、あるいは得体のし

れない又は不吉な出来事が発生した時、人々は直接カムイ・フチに助けを求めたり、遠くの神々に説得力ある影響を及ぼしてくれるようお願い求めるのです。カムイ・フチには使者と補佐がいて、彼女が指図することがらを執り行ったり、彼女の求めに応じて他の神々の代理を務めます。これに該当するものに、飼い犬、宝として大切にされる頭骨の中のキツネのラマツト、そしてさまざまなチニスク・カムイがあります。これはいつの神で、そのラマツトは病のときや予防措置が必要とされるとき、屋外の神々から来るものです。

⑭チセ・コロ・カムイ、即ち家の聖なる領有者、が屋内神の2番目に当たり、人の形をした象徴的な工作物によって目に見える形で表現されています。この工作物は、小屋の中の、家宝を置く北側と、ロルン・ブヤラと呼ばれる東向きの聖なる窓（神窓）との間の角・隅に置かれます。この聖なる窓は炉の真向かいに位置しています。窓であり風が吹き抜ける窓であるこのロルン・ブヤラ越しに聖なるさまざまな物が手渡しされ、聖なるラマツトは手招きや呼び出しの合図に応じて自由に出入りします。チセ・コロ・カムイのラマツトは、宇宙を覆う植生の聖霊であるシランバ・カムイから来ています。チセ・コロ・カムイの神体は通常、木、それもライラック〔ハシドイ〕の木からできており、この木は悪の力によってすぐに朽ちるということがありません。家それ自体にもまた、植生を司る神に由来するその家固有のラマツトがあります。性は女性で、家の主婦あるいは祖母が亡くなると、昔は常に必ず、そしてしばしば現在でも、その家は焼き払われます。亡くなった人にラマツトが付き添って行く、即ちシランバ・カムイにともに還るためです。チセ・コロ・カムイの性は男性で、消極的で控えめなラマツトではありません。アベ・フチの次に家の命運をにぎっていて、火の女神の伴侶であると信じる者もいます。

⑮屋内神の3番目は家の中ではなく庭に住んでいます。ヌサ・コロ・カムイ、あるいはヌサ・コロ・フチと呼ばれ、女性です。眼に見えないラマツトは自

分自身の永遠の住家を持つてはいるのですが、家の外の、縦型の小さな枠組みにイナウと呼ばれる捧げものの列が設置されています^{*(7)}。こうしたイナウの列あるいは束がヌサで、これについては後程見ていきます。ヌサ・コロ・フチは屋外域を統べ治め、庭に侵入しようとする人間あるいは超人間〔霊〕を見張っています。この女神はまた、穀物の守護神でもあります。彼女は雷の神であるカンナ・カムイの系統を引くものであることから、ヘビの身内ではあるものの、ヘビに対しては抑制的にしか力を行使しません。いろいろな名称を持っていて、そのうちの一つがチランゲ・ハル・エブングネと言い、天から来た糧食、即ちキビの守護神を意味しています。この女神はプ、即ち貯蔵庫を守り、極度の病や荒れ狂う疫病の際に時として懇願の対象とされ、熊祭においては重要な役割を担います。その熊祭では、屋外の集まりの女主人役を務め、若いクマが時として命がけで暴れる時に、だれも怪我することがないように見守って欲しいと、特に頼まれます。

⑯屋内神の全てについて話し終えたわけではありませんが、その他残りの神々は低い地位にあることから、ここでは左右いずれの側にも男と女の神が宿る戸口と窓について述べるに留めます。しかしここでしばらくの間、イナウ、ヌサ、そして祭りのためだけの特別な工作物に注目しておくことは大切です。イナウと呼ばれるこの特筆すべき作り物はオイナ・カムイによりアイヌに授けられたもので、神の好意を得るための確実な方法をアイヌの人々に賦与してくれるものです。軽薄な人たちはかつてイナウのことを、削っただけの棒切れと呼んでいましたが、傘というよりはそれに近いからでした。イナウはらせん状に削った木です。棒といっても良いでしょう。ただ、非常に特徴的で、しばしばそれ自体に備わった美しさがあります。[ポーランド人の研究者] ピウスツキが示唆するように、このイナウという呼び名は、猟の後、細長く切った肉片を吊るしておくために使う、枝が付いた柱状の棒に関係があるのかもしれませんが。こうした肉片を取り外した後、その代わりにらせん状の削り物を吊るしておくのが習慣であるようです。しかしその一方で、こ

うしたらせん状の削り物は別の状況下においても肉片や内臓にとって代わるものとして使用され、さらには、ラマットの持続性を保つ上で必要な霊媒をさまざまなものに賦与するためにも使われます。この言葉はひねるための x x x と関連があるかもしれないし、アイヌ語の訛りかもしれません。イナウは明らかに人間の姿に似ていて、古代の伝承では移動する能力があると信じられ、そこから使者と呼ばれています。世界の他の地域における低位文化では、長が使者・伝令を遣わしたいとき、奴隷を殺すことがあります。その奴隷が約束を守ったなら、これは十分論理的なやり方です^{*(8)}。アイヌは現在も鳥を捧げものとして殺すことがあり、パチラー博士によると、これは神々の許に伝言を運んでもらうために為されるものだということです。古代アイヌ伝承の中には、人身御供^{*(9)}の痕跡が認められます。

⑪イナウのある種のもは脚に当たる部分にらせんが施されますが、これらはラップ即ち翼として認識されています。このことは、「黄金の翼を飛ぶ足にくくりつけ、西の風に乗る」ヘルメース〔ギリシャ神話の神〕を我々に思い起こさせます。また他のイナウには幹の部分に樹皮を残したままのものもあり、そこに刻みをいれ、若干の長さに剥いだ翼、即ちラップが作られます。イナウに限らず他の物にもこうした工作を施すのですが、いずれにしろその意図するところは、祈りあるいは霊が外に向かって出ていくことを助けるためです。

⑫ヌサと呼ばれるイナウの束あるいは列は、イナウの効力を増してくれるものです。このヌサという言葉がそもそも意味する内容は、日本語の幣（ぬさ）との関連でたびたび論じられてきたはずですが、どちらも、人身御供の代用語として考案されたものだと考えることは何ら不自然ではありません。日本語の幣は解釈からもまた現在も残る用い方からしても、布をあらわすと信じられているのですが、一般に布というのは他の地域でも人身御供の古い代用語となっています。それはともかくとして、イナウは捧げものとしてあまり

にも受け容れやすく、あまりにも魅力的であることから、それにはほとんど魔術的な迫力があり、同時にこのように適切な形をしていることからアイヌの人々の目には、イナウは目に見えない力であるラマットのまたとない体と映ります。

①9しばしばボロ・ヌサ（偉大なヌサ）とも呼ばれるイナウ・サンは通常ヤナギを材料とする柱を使って組まれた枠組のことで、ヤナギには根を張り育つ性質があります。このイナウ・サンは聖なる窓、ロルン・プヤラの反対側に置かれ、その北側にポン・ヌサ、即ちヌサ・コロ・フチに献げられる小さなヌサ、があります。イナウ・サンはロルン・プヤラにやや斜めに立て置くのですが、そうすることで吹き倒されること…これは悪い前兆…の可能性が少なくなるからです。偉大なヌサと小さなヌサの間には、聖なるラマットがやってきてまた再びアイヌの家から旅立っていくための通り道があります。この間隔には誰も立ち入ってはならないとされています。イナウ・サンと聖なる窓の間を通り抜けることを避けるのは、常に守られているとは限らないけれども、今でも習慣としては残っていますし、また聖なる窓から覗き込むことは許されざる罪とされています。

②0さまざまな種類のイナウをこれから見てもらいますが、ここではしばらくの間、神々に神酒を捧げる際に使われるいわゆる「口髭上げ」棒に注目してもらいましょう。外国人が付けたニックネームなのですが、液体を容易に口に入れるためには、髭深い唇のための特別な工夫が必要で、その意味合いを漠然と関連付けたものです。アイヌ語ではイクバシュイ、即ち飲み棒〔捧酒箸〕と呼ばれます。椀の上に置かれていて、口髭がその椀の中に入らないようにとしばしば使用されてはいますが、この名前は、神々にワインの滴を差し出すという機能から来ています。片方の端…通常とがっています…これをキビのビールまたは酒にわずかに浸し、それからその液体を神に、即ちその代理者であるイナウに振りかけます。イクバシュイにはもう一つの、そして

より崇高な使用目的があり、その元々の起源について振り返っておきましょう。これは祈りが彫られた棒状のへらです。前方部分の端には舌があるのですが、これはその先端に小さな三角形を刻むことで、あるいは渦巻き状に削ることで伝統的に表現されています。この舌は味見のためではなく、話すためのものです。古い伝承においてはチンテックと呼ばれていて、聖なる使者であるサンゴ・コロ・カムイの召使を意味します。速足のことをパシュ・ハシュと言うのですが、これは使者が守るべきペースを意味し、そこからこの言葉が生まれてきた可能性があるかと私には思われます。他方、ハシュ、即ち「柴」に由来するかあるいはそれに関係があるのかもしれませんが。後で見るようにこの柴は、パシュ・イナウやパシュイ即ち物を食べる時の棒として今でも使われています。イクバシュイは今日、神々への祈りを軽やかに届けてくれる使者であり、不可視の霊界からの伝言を運んでくれるものとさえ信じられています。枕の上で振動することによりこの役目を果たすとは言うのですが、それらの無線語は誰にも解読できません！

②①その原初的出処については、祈祷と呪文の区別がまだ無く、呪いから完全に切り離されていなかった時代に使われた、祈りを彫刻した「へら」にまでさかのぼることができるかもしれないし、トーテムの棒であったかもしれませんが。後者の推論は、いくつかのイクバシュイにイトクパ、即ち家の刻印、が使われていることがその確証となります。この刻印の元々は刻み目なのですが、現在ではさまざまな彫り文様が存在します。イトクパはいくつかのイナウでも認められ、そこからイナウ・シロシュ [印] と呼ばれています。これは日本語から来ていて、後世そのように言い慣わされるようになったものです。常日頃から祈願の対象とされている3人の家事神の場合にはこのような刻印はその判別用に必要ではなく、その結果として、純粹に家族の者だけで執り行う祭以外、とりわけ熊祭、において使われるイクバシュイのひとつの変形に落ち着きます。これがキケ・ウス・バシュイと呼ばれる削り物で、これらの削り物は翼であり、その翼のひとつ、通常前方の翼に刻印があります。

祭のときに必ずしもすべて*₍₁₀₎に付けてある訳ではないことから、どんな客であれこの印を捜すことは礼儀に反することとされます。

②いよいよ本題の熊祭に入ります。この祭りの根源的な意味については遠くの昔までさかのぼる必要はなく、他の多くの地域で今でも行われている類似の儀式が同様の考えに基づいて執り行われています。ただ歴史的に言えば主にヘロドトス、プルターク、パウサニアスなど、古代の作家の記述に見られる古くからある物語です。この熊祭の儀式は、オシリス、ディオニュソスその他多くの神々のように、神は一度必ず死んで、蘇り〔再生〕を経て、以てより強い活力を人類に授ける、という根源的な考え方がベースにあるのです。下位文化のほぼすべての位相でそうなのですが、神は若さの盛りにある時に殺されなければなりません。アイヌの場合も同じで、そこではまた、成熟したクマを生け捕りにすることの難しさや、十分に成熟するまで飼育していく上で考慮すべき経済的な難しさがからみあっています。

③仔グマは3月に捕えられたときに1ヶ月か2ヶ月齢であることから、正月のころに生まれているものと思われます。4月にもなれば捕えるのが難しくなります。母グマが逃げたかまたは殺されたために人間に捕えられた仔グマは、家に運ばれ清めの儀式のためにイナウ・サンに連れてこられます。生命を約束する太陽が昇る東に頭を向けて、ヤナギの枝によるブラッシングが行われます。この儀式行為はカシ・ウ・キク、即ち「天からの毛づくろい」と呼ばれています。その後にロルン・プヤラ、即ち東の聖なる窓から家の中に入れられ、エカシ即ち家の長老がキツネまたはカメの頭骨を炉辺に置き、火の女神、カムイ・フチにこう祈ります、「どうかこの仔グマが生きながらえることができるようマラプト・カムイ…これら頭部のラマツトとして知られている…にご指示ください」と。この仔グマはソントック即ち聖なる幼児として知られ、周りからのさまざまな世話・気遣いを受容することとなります。小さな檻が庭の南東の隅に用意され、家の中では女主人あるいはおばあちゃ

んが薬草の根を嚙んで炉の周りに吐きかけます。キツネまたはカメ（時に両方）の頭骨をその檻の上に置き、イナウルと呼ばれるらせん状の削り物8束を、各隅に1束ずつ取り付けます。この後クマは安全に中に入れます。餌として細かく嚙み碎いた魚を直接口うつしで与えたり、時に女主人の母乳で育てられることもあります。仔グマが大きくなってこの最初の檻では狭すぎるとなると、前回と同じような注意を払いつつより大きなものが屋外に造られます。ただしこの時には、いわゆるチニスク・カムイ、即ちいつ時の神、が用意され、カムイ・フチの仲介によりシランパ・カムイからラマツト、即ち靈魂が呼び出されます。この神はヘベレ・エプンギデ・カムイ即ちクマの聖なる統率者と呼ばれていて、ライラックあるいはウワミズザクラの木で作ります。それを、神 [= 仔グマ] の爪が届かないだけの距離を保って檻の北東の隅にある柱に立てます。顔に相当する面を檻の内部に向けて立てますが、時にこの神を、さほど仔グマの関心も呼ばず不安にもさせない西向きの窓に置くことがあります。驚くことに仔グマには時折水浴びをさせ、餌を十分与え、病気になるば薬や魔術、祈祷を施し、成熟の年に至るまで手厚く世話します。

②4ヘベレ・イオマンデ、即ち送り祭は原則として年の初めのころの、月が満ちつつある時期に催され、決して月が欠けていくときに行われることはありません。このことは、自然現象が増大とか成長を約束してくれるときにこのような死は最も幸先良いものとなる、という原初的な信仰に沿うものです。ヘベレ・イオマンデが秋に催されることはほとんどありませんが、神としての確かな地位が与えられていない動物の送り出し儀式はその時期に普通に行われています。例えばキツネ、タヌキ、ワシ、フクロウ、コノハズク、エゾオウム (Yezo parrot) やハシボソガラスなどがこれに該当します。これらの動物の儀式には、食料の増産という目標はなく、使者として送られるか、トーテムの生命存続のために送られます。私自身も後者だろうと解釈しています。これらの動物の像は祭のときに目にするサパウンベ、即ち冠に付いています。サパは頭を意味しますが、サップは単に坂を下る、降りるというのみならず、

世代を下ることをも意味します。

㊤何週間にもわたって行われる熊祭の事前準備の詳細については触れないでおきます。天与の穀物であるピヤバ、即ちキビを乾燥し、粉に搗き、風選別することに多くの時間が充てられます。このキビからイナウ・コラシュコロと呼ばれる聖なる飲物を造ります。軽く煮たキビを、前年の夏から仕込んでおいたカムダチ、即ち酵母菌と混ぜ合わせて造ります、と述べるにとどめます。この混ぜ合わせたものを大きなシントコ、即ち通常は朱塗りの桶〔行器〈ほかい〉〕に入れ、ムシロや布きれをその上から覆いかぶせて温度を保ちます。イナウル、即ち聖なる削り房によってこれを悪い霊から守るのですが、そのやり方は魔法の薬草を噛んでこの桶の周りに吐きつけ、キツネの頭骨をその上に載せ、時には、害をもたらす神々を避けるお守りとして外側に鎌をくくりつけます。出来上がったと思われる頃に、小規模な儀式を執り行い、イヌンバ・シュトゥという、今お見せするような口が付いたとある小さなイナウに供え物を捧げます。イヌンバというのは「濾す」を意味し、この作業が行われている間、これらのイナウには酒粕がふるまわれます。三人の家事神に祈りを捧げ、鍋を吊るしたカギにも同様に粕をふるまいます。これは、この神々に間違いなくとても喜ばれます。その後、できた飲物の味見のために友人たちを呼び入れ、家事神に神酒を捧げ、続いてカムイ・フチへの供え物としてこのイヌンバ・シュトゥを燃やします。戸口の神々も忘れられるようなことはなく、きちんとした分け前がふるまわれます。その後、粕はイナウ・コラシュコロともども、祭りのためにとり置きます。キビ団子をゆで、儀式用の聖なる杓子でこれをすくい上げ、それほどめでたくはない時、特に葬儀の際に出す丸い団子に見た目が似てしまわないようにと、それぞれの側面に切込みを入れます。これらの団子には、屋外の祭で撒かれる球形をした小さなものもあれば、死の前後に聖なる仔グマを喜ばせるためにと甘みをつけた小さなイナウ・コラシュコロまでさまざまなものがあります。祭場で供される食べ物の主なものとしては、凍らせたサケを解凍し、細かく刻んでサケの卵と混ぜ

合わせたもの、そしてシリカップと呼ばれるメカジキの脂があります。死にゆく神 [= 仔グマ] への別れの贈り物と、その両親に持って行ってもらう贈り物について言及しておきましょう。前者用には、シリカップの頭皮の一片を結び付けたサケがあり、死後に口元に置きます。後者用としては、木製の2本の串に刺した団子があります。一本には16個のキビ団子を、もう一本には15個の米団子を刺し、その2本をイナウルでくくりつけます。これをイモカ・シュトと言い、イモカという言葉は日本語の「みやげ」と同じ意味を持っています。

②⑥他の準備も急ぎ進められなければなりません。祭の何日か前にヘベルアイ、即ちヘベレの矢と呼ばれる、先端を削った、飾り付きの矢（花矢）を作ります。この矢の頭・頂部には「眼」の文様があって、6個または4個ついており、常に2種類の文様からなっています。この矢は仔グマに決定的な傷を負わせるためのものではなくて、単に興奮させて勢いづかせるためのものです。祭の2、3日前に各種イナウを用意しますが、3種類だけは祭当日の朝に作ります。樹皮を残したままの生木で作るハシュならびにシュトゥ・イナウと、タクサ・イナウの3種類です。ご覧のように、笹の葉を冠状にかぶせて生命を表します。ヘベレの足にひとつずつ必要なことから、合計4本作らねばなりません。これらを祭が始まる前にイナウ・サンの前に立てます。祭の朝にさらに二つの物を作ります。ひとつはヘベレ・シンダ、即ちゆりかごと呼ばれる二叉状の棒で、これは頭部を支えるために用います。もう一方は樹皮を剥いていない木から作った短い横木で、クマの頭部以外の重要な部位を運ぶための翼、即ちラップが付けられています。イナウ・サンのところで最終的に役目を終えるまで、この横木は又木（シンダ）の下部に取り付けられています。この横木はオク・メウエ・ニと呼ばれ、その意味するところは多分、「首を分かつ木」だと思われます。というのは、切断役の人が恐ろしいうめき声を上げ、この横木の上で首筋を最終的に切り落とすからです。

②⑦祭を控えて、家を飾りゴザできれいに飾り、武具はすべて壁に掛けます。床には飾りつけのないゴザを敷き、イナウルの飾り輪で装飾され清められた偉大なシントコを、歓喜と陶醉に溢れた聖なる窓内に立てます。その近くには、漆塗りのトゥキ、即ちお椀を載せたお盆を置き、その縁にキケ・ウシュ・バシユイ、即ちシャネン・パシユイ、を横にして載せます。

②⑧ロオンベと呼ばれる見事な刺繍が施された祭礼用の衣装を着けたチセ・コロ・エカシ、即ち家主が炉の北側に座ります。この衣装にはエンブレム〔象徴文様〕を前面につけたサパ・ウンベ、即ちイナウルの冠があしらってあります。日本の古くからの羽織り物であるジンバオリと呼ばれる上着をまとっている場合もあります。同じくロオンベを着た息子たちと婦人たちが、並んで客人を待ちます。ただ、息子の一人あるいは二人は客を招待するため外回りに出ています。これらの招待は事前にはせず、祭りの朝に行います。場にふさわしい正装で身を包んだ客人が到着し、祭主が自分の席につきます。この役割は家主ではなくて、親戚だとかコタン内で高位を占めるものが担います。時に遠方のコタンからやってくる場合もあります。さまざまな役柄とその任務、特権を説明し出したら今晚中かかってしまうと思われますので、私たちによりもこの人たちに興味関心があるそういった事柄についてはここでは割愛します。この場面での作法はとりわけ厳しく複雑多岐にわたっていて、祭りにふさわしいとされ、大昔からの習いで聖別されてきたマナーや習慣に反したことをしてしまった不幸な輩には非難の声が浴びせられます。いかなる礼儀作法の欠如であれ、それが最終的な楽しさに結びつくのであれば、その前に為された無作法についてとやかく言われることはなく、もし言われてもあれこれ苦言を呈する者は多くは残っていません。

②⑨客人が到着すると、その地位に間違いなく見合った席に案内され、着座します。客人は家に入る前に咳払いに似た音を発し、そして足を洗うことなくゴザに座ることはありません。主賓がそろそろまでは誰も家主に挨拶をしま

ん。ただし、炉の右側を通る際には誰であれカムイ・フチにオンガミします。すべてが整いました。仔グマの守護神であるチニスク・カムイは、聖なる窓の脇に縦に飾りつけられたゴザに無頓着に寄りかかっています。炉の近くの特別なゴザの上には、チセ・コロ・イナウと呼ばれるきわめて特別なイナウが立てられます。自らの隅で静かにしているチセ・コロ・カムイと混同しないでください。チセ・コロ・イナウは家そのものとそれが建つ土地の精霊に献げられています。炉の灰に4本のイナウが一行に立てられ、火の女神への捧げものとして燃されるのを待っています。炉の下端には同じ種類の2本のイナウがあり、これは戸口の神々への捧げものです。三人の家事神それぞれのために、神酒用のお盆が別々に置かれます。また、炉の上端近くにもうひとつのお盆があり、そこにはキツネやイタチ、アホウドリ、シギの頭骨、そして柄杓のカムイ・マラプトがいます。また、家の宝物の隣に置いてあるもうひとつのお盆にはオオカミやカメの頭骨を含むその他のカムイ・マラプトがいます。

③重要な客人が到着し、饗宴の役職を務める者たちはそれぞれの席に着きます。そこで家のエカシが最後の咳払いをし、挨拶のオンガミをするのですが、これは世界中最も優美かつ人の胸に訴えるもので、要するに人間味あふれる所作だと言えます。これに対し客人たちも全員が咳払いして応じます。饗宴が始まったのです。いつ終わる、ですか？朝まで続きますが、それまで皆さんにお付き合いしていただくことはしません。皆さんも忍耐の限界まで来ているでしょうから。主要な客人たちは、炉から聖なる窓に延びる二列に並んで座ります。クマが死んだあとはこの列が窓と直角になります。自らの隅にいるチセ・コロ・カムイと屋外の小さなヌサにいるヌサ・コロ・フチに神酒をふるまうため、何人かのエカシが選ばれます。カムイ・フチへのこの儀は家主が行います。他の人たちも、イナウ・サンにいる屋外の神々に対し同じことをするよう催促されます。こうして選ばれた人は、拝礼行為を始める前にカムイ・フチに短い祈りを捧げ、この女神に自分の役割を告げます。こ

れが行われている間に、ウエショブキと呼ばれる、客人の配置を行い、聖なる飲物が一方の側からもう一方へと手渡しされていきます。詳細を述べても退屈でしょうから一つの事だけ紹介しておきますと、婦人たちが注ぐこのワインを、最初に受け取ったエカシが飲むことはありません。盃を単になでるだけで対面の客に渡します。するとその客はオンガミをしてから飲み、一人の女性のために少しばかり残しておきます。この女性は持参してきたお椀にそれを移し替えていきます。そこから飲むためではなく、礼儀にかなう作法の範囲内でこの飲み残しを集めていくのです。このようにして飲んだ後、エカシは再び注いでもらい、対面にいる喉の渇きをうるおさんと慇懃然と構えている紳士にこれを手渡します。このようにして盃がやり取りされ、その間、屋内外の神々も少しはご相伴に与ることとなります。客人それぞれが祈り献盃するので、各自ほんの少しばかり残しただけのものが、宴が終わるころには結構な量になっていきます。しかし酒は飲まないという訳ではない神々は、宴終了の時にはそれなりに楽しんでいるように見受けられます。火の女神を除くすべての神々はイナウにより表象されるということを私は十分明確に説明してこなかったかもしれません。チセ・コロ・カムイとチニスク・カムイはその体が事実上イナウであり、例外ではありません。

③①外回りの守り神であるヌサ・コロ・フチには、屋外で行われていることがとどこおりなく進み、誰も怪我することのないように見届けてください、と特に懇願します。このことについては既にお話しました。

③②そうこうしている間に、仔グマは輪縄で捕えられ、檻の外に出されるのですが、そう簡単には事が運びません。すでに大きく育っていて、なかなかすんなりと言うことを聞いてはくれないからです。しかし最後には2本の輪縄を、首に1本、前足に1本掛けられ、檻から出されます。エカシたちが家から出てきて、小さなヌサと家の北東の角の間にまっすぐに、雪の上に並べられたゴザの指定された席に座ります。北の地域においては刺繍されたコート

をクマに着せるのが一般的ですが、南の方では必ずしも広く行われてはいません。クマも2歳になるとたわむれるには危なすぎるため、地中深くに打ち込まれた頑丈な柱につながれます。丈夫な弦でできた首輪にはロープが結び付けられていて、これで自由に跳ね回ることができます。そうでない時には、エカシの前に連れてこられ、まずこの第1幕でエカシがオンガミします。するとクマは走りだし、このクマの爪を誰かにかけさせようとするかもしれない悪霊を追い払うために用意された2本のイナウのひとつに乱暴にかみつきます。このようにさせておくことでクマは注意散漫にならないでいるようです。こうして走り回っていることはクマが喜んでいるのだと理解されています。次の第2幕では、クマがエカシに近づくと、前述した特別な矢がクマに向けて放たれます。北の地域では短く鋭い矢じりがついているのですが、半インチ [1 cm 少し] ほどしか刺さりません。その効果の程はおそらく興奮の度合いと釣り合うのでしょうが、非常に心地の悪い興奮状態には違いなく、我々には残酷に思えます。南の地域では、矢の先はほとんどが尖っていません、それでも当たただけで大暴れはしますが。第3幕に入ると、第2幕の時点ではまだ用意が整っていなかった者たちが矢を放ちます。北の地域では男の子にこの役割が振り分けられています。2歳のクマの場合、熟練した射手が特別な矢を放ちとどめを刺します。もしこれが成功しなかった時は、血を流すことは良くないことであるとされているので絞殺により処置します。アスルベ・ウクと呼ばれるグールー [精神的指導者] がクマの両耳を捕まえて押さえ込みます。これは危険な作業で、先ず後足を誰かに持ち上げておいてもらってから取りかかります。死を迎える場所はイナウ・サン南端で、頭を東に向け、大騒ぎと奮闘の中、二本の重い柱で絞殺します。幸いにも死はすぐに訪れます。息が逃げ出さないよう鼻を閉じます。これは多分、ラマツトが何かのはずみで急に動き出さないようにととられる警戒措置なのでしょう。アイヌの女たちの嘆きが聞こえてきます。あの葬式の時の哀れさが伝わる最期の唄です。普通に感情を表しているのですが、そこに居合わせた者誰もが一瞬その思いを感じ取り、平静を保つことは実に難しいと言えます。ヘベレの

死にすら涙する婦人たちを私はこれまで見てきました。これら一通りの手は
 ずを終え、短い哀悼の時間が終わるとすぐにその場の雰囲気が変わります。生
 きている時のクマは人の心を知る由もありませんが、靈魂となった今は自由
 で、すべてを理解します。団子がまかれ、イナウ・サン越しに放たれた矢を
 追いかける男の子たち、ごちそう、踊り、酒盛り、、、クマにも祭に加わって
 この様子を見物してほしいとみんなは願っています。結婚式の祝席のような
 華やかさと陽気さに包まれます。家の屋根の上から団子がまかれ、若者たち、
 たまに元気あふれるお年寄りたちも、我先にと群がって団子を拾います。ヘ
 ベレアイを放つことをリコプセと言い、すべての束をクマの体に向け放ち終
 えるまで、矢が確実に当たっていることが確認できるまで続きます。神聖な
 接触は広がりやすいからです*⁽¹¹⁾。その後ワインを死んだクマ、チニスク・
 カムイそしてヌサ・コロ・フチに供え、これを客人が順番に繰り返していき
 ます。この間に他の人々は宴が続く家に入ります。神の体を、血が不浄な土
 につかないようにと新鮮な芦の上に横に寝かせます。神の毛皮を剥ぎ、内臓
 を取り出し、血はトゥキに注いで、これを飲みます。なぜ血を飲むかといえば、
 それが生命であり、神の生命は人間をより幸福にしてくれるからです。この
 儀礼は人類の太古にまでさかのぼるものであり、今日の原初的な下位文化にお
 いて行われているものも、歴史の裏側のことであったものも、そのモチーフ
 は同じものです。神の体のある部位は生で食されます。ギョッとされるかも
 知れませんが、生焼けのビーフ・ステーキや生のカキに異を唱える人はいな
 いでしょう。個人的には腎臓も肝臓も焼いた方が好きだし、できれば肺も、、、
 まあこれは、味覚の問題ですけどね。言い忘れていましたが、体から頭を切
 り離す時は、首をオク・メウエ・ニの上に横にします。そして前にも言った
 通り、役を果たす人の哀れを誘ううめき声とともに最後の一撃が下されます。

③家の中では少しずつ礼節を失いながら宴が続きます。今の時代に残してお
 くべき詳細について語りだしたら、皆さんはへとへとに疲れ切ってしまうで
 しょう。毛皮がまだついたままのヘベレの頭を聖なる窓から運び入れ、説明

するのにとても時間がかかる作法に従って解体していきます。ここでは短く、眼、舌、脳に代えイナウルを…イナウルというのは実に、ラマットの詰まったライデン瓶のようなものです…そのイナウルを用い、そして、皮は剥ぐが両耳は残す、と言うにとどめておきます。この解体作業が行われている間、そして宴の終わるまで、神に喜んでいただけるとの想定の下、踊りと酒盛りが行われます。ただただ楽しみのためにそうしているだけだという説もあります。宴は客人の地位により手はずが定められています。毛皮をたたみ、これをクッションのようにしてその上に頭を載せ、神の前に食べ物と飲物が供えられたロルン・プヤラの左側に置きます。踊りには2種類あります。ひとつはタプカラで、これは足を踏むポーズで踊る単独の踊りで、歌をともない、昔から太鼓の代用品であるシントコの蓋をたたき鳴らすこともあります。もう一つはリムセと呼ばれる、普通、円舞の形を取るものですが常にそうとは限りません。さまざまなバラエティーに富んでいて、その多くは真似事を身振り手振りで表す種類のものです。誰もがこの楽しさの輪に加わり、アルコールにより生活がままならないという暗い影にも拘らず、これらの貧しい人々が我を忘れて楽しく大騒ぎしているのを目の当りにすると、心休まる思いがします。運命の歯車が狂い、娯楽というものがまるで存在しません。だから、健全なレクリエーションをこの人たちに提供できるのであれば、このとてつもなく大きい悪魔を払う一助となるでしょう。夜更けとともに楽しさは急速に増し、荒れ狂うほどの激しさを帯びてきます。神々と人間の物語に耳を傾ける…多分聴いているのでしょう…何人かの深酔いした者あるいは飲食に興味を示さない者を残して他に誰もいなくなるまでこれは続きます。こうして語られる物語を通して、人間のみならず神々もまた過ぎ去りし日々の出来事を学び、大いに啓発されていくのです。夜が明け始めて差し込んでくる一条の光が、ヘベレ・ラマットは山にいる祖先の元に帰らなければならない時が近づいたのだということをその場の人々に告げ知らせます。

③4送りの実際の式典はケオマンデと呼ばれます。陽が昇るころ、頭部と眼や

舌などの代表部位をフォーク状の棒、ヘベレ・シンダに載せて、聖なる窓から次の段取りのために手渡しし、イナウ・サンに向かって行列が進んでいきます。中央でシンダを垂直に持ち抱え、その間に屋外の神々とヌサ・コロ・フチに神酒がふるまわれ、ヘベレにはお別れの供物を用意します。エカシが、時には婦人たちも加わって、最後のリムセを踊ります。クマの魂への最後の踊りで、一緒にお別れのオンガミをします。心打たれる、また心に残る光景です。神の頭は東向きに置かれ、1、2時間あるいは数時間の間をおいて、但し間違いなく正午になる前までに、この頭を西向きとなるよう置き換えます。ラマツトは最後の出立に向け十分な時間が得られたのです。

㊥その後、親戚の者と友人たちが集まってポロ・オメカップの宴を祝います。ここでは、神に捧げるカムイ・ノミに加え、この家の息子の祖父にも神酒がふるまわれます。この式典はシンヌラッパ・エカシ・ノミと呼ばれ、「我らが供え物、先祖に届け」という意味があり、ワインを地面に振り注ぐことにより執り行われます。通常は南東の角の近くで行いますが、所によっては小さなヌサの近くで行われることもあります。この宴の間、クマの毛皮を聖なる窓の近くに安置し、代理物としてキツネの頭をその毛皮の上に置きます。

㊦一日か二日の後、聖なる飲物の残りを…もしも残っていればの話ですが…家族の者だけに限定された集まりで飲み干します。これはボン・オメカップ即ち小さなオメカップと呼ばれます。オメカップという言葉は、饗宴から残り少なくなっていくごちそう、を意味しています。成熟したクマのイオマンデに引き続いてこの小さな宴が催されると、それはオムケップと呼ばれます。

（完）

訳者注

【総 論】

1. 「『熊』祭り」は儀式的名称として漢字表記し、動物そのものを指す場合は「クマ」とカタカナ表記した。他の動物名も同じ。
2. すでに定訳となっている「神窓」、「花矢」他の言葉は、初出時にその旨（ ）に入れて表記したが、他はすべてマンローの表現に従い、「聖なる窓」等として残した。
3. 原文のローマ字表記は「イオマンデ」を含めそのままカタカナとした。
4. 原文記事中、何ヶ所か判読不明なところがあり、x x xとして表記した。
5. 本文中、訳者の追加注記は〔 〕で挿入した。

【各 論】

1. 新聞の日付は1916年4月30日（日）であるので、ここは4月26日（水）を指すと思われる。
- 2, 3. 原文は“for sacrifice; not sacrificed”で、「生け贄のため、生け贄にされない」の意。しかし、熊・神送りには不適切なコンセプトであることからこのように言い換えた。
4. 「lower culture」：現在の文化人類学では使われない概念。
- 5, 6. “shirampa”と“siramba”の両方が現出している。“Epungine”“Epungide”も同じく。単純に新聞社側の誤記の可能性がある。
7. 「永遠の住家を持つ,, → イナウが設置されている」と、二つの別々の事柄が一文に収まっていてそのつながりが不明。おそらく、「永遠の住家を持つてはいるが、イナウに仮住まいすることもある」といった流れだと推察するが、原文はそうにはなっていない。
8. ここの論旨、訳者には不明。
9. ここでの「人身供養」は土偶のことを指すものと思われる。
10. 「すべての」何か、は不明。「すべての人」と読めなくもない。
11. 「神聖な接触は,,」：趣旨不明につき文字・辞書通りの訳。

資料2-1

写真に見る

平取のジョン・バチラーと
ニール・ゴードン・マンロー

写真1, 2, 3, 4, 5

いずれも筆者写す

(2015年8月26日, 27日)



1 平取町歴史の散歩道 ジョン・バチラーの碑



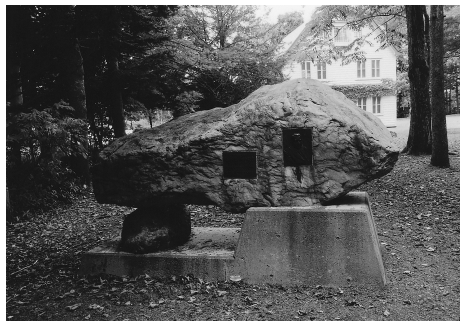
2 バチラー保育園と平取教会(中央)



4 平取小学校にある遑星北斗の碑



3 ジョン・バチラー記念館(バチラー保育園)



5 マンロー顕彰碑と旧マンロー邸(奥)



写真提供 森岡健治氏 (トイビラの丘)

資料2-2

写真に見る

平取のジョン・バチラーと
ニール・ゴードン・マンロー

写真1, 2, 3, 4

いずれも筆者写す

(2015年8月27日)



1 ニール・ゴードン・マンローの墓碑



3 トイビラの丘の入口にある「二風谷
部落有縁無縁三界萬霊之塔」



2 貝澤正の墓誌と並ぶマンローの墓碑



4 アイヌブリ(式)の木の墓標(トイビラの丘)